

主な参考文献

あとかき

.....

322

321

句

宮

におうのみや

覚束な誰に問はましいかにして始めもはても知らぬ我身ぞ

気がかりなことよ。誰に尋ねたらよいのだろう。どのようにしてこの世に生まれ、この先どのようになっていくのかも分からぬ我が身であることだ。

「覚束な」は、気がかりな、また、不安な意を表わす形容詞「覚束なし」の語幹で、詠嘆を表わす。「いかにして」は、どのようにしての意。

紫上亡きあと、源氏五十二歳の一年間を綴って、源氏の出家と死を暗示しつつ幻の巻が終わり、巻名のみ雲隠の巻を置いて源氏一代記は終焉する。

源氏物語三部説においては、光源氏の誕生から栄華の頂点を極めるまでの、桐壺から藤裏葉までの三十三帖を第一部とし、女三宮の降嫁、それに伴う紫上の苦悩と死、その後の源氏の出家と死を暗示する若菜から幻（巻名のみ雲隠）までの八帖を第二部とする。いわば、源氏の一代記で、これを正編とすれば、それより九年の空白期間において、続編ともいうべき、源氏の子孫たちのことが物語られ、句宮・紅梅・竹河の三帖、そして、宇治十帖といわれる橋姫から夢浮橋までの十帖を

紅梅 こうばい

心ありて風の匂はす園の梅にまづ鶯のとはずやあるべき

思ふ心があつて風が匂いを吹き送る園の梅に、なにはともあれ、鶯が訪れてこないことがありましょうか。

「梅」は中君の、「鶯」は匂宮の喩である。結句の「や」は、反語。「べき」は、当然の助動詞の連体形で「や」の結び。

致仕大臣ちしのおとど（かつての頭中将）も逝き、柏木亡きあとは次男の紅梅大納言（かつての弁少将）が家督を継ぐ。明石中宮を頂点とする源氏一族に対抗して、亡き北の方との間にもうけた大君を東宮妃として入内させ、続いて同腹の中君を匂宮の妃にと望む。が、匂宮は、むしろ、螢兵部卿宮の亡きあと、今は大納言の後妻となつている真木柱の連れ子、兵部卿宮の遺児である宮の御方に関心を寄せていた。

さて、ある日、紅梅大納言は、大君に付き添つて宮中に参上している真木柱への伝言を子の大夫の君（真木柱腹）に託すが、そのとき、軒近くに咲く紅梅の一枝を折つて宮中にいる匂宮に届けさ

せ、意中を訴えた。

掲出歌は、その枝に添えた大納言の匂宮への贈歌である。「心」に、匂宮と娘の婚姻の意をひびかせる。歌の前に、「闇に惑ふはるけどころに、聞え犯さむかし」という大納言の言葉がある。作者は本文中でしきりに源氏亡きあとの世の寂しさを強調するが、この大納言の「闇に惑ふ」の「闇」も、源氏亡きあとの寂しさに惑う心の闇である。その闇を源氏の忘れ形見である匂宮によつて晴らしたいという。「聞え犯さむかし」は、あえて申し上げようの意で、そこに匂宮への謙讓の意が働いているとしても、歌の結句は「とはずやあるべき」とかなり調子は強く、居高な感じがしなくもない。大納言は藤原氏の長おきであり、匂宮がまだ若年であるとしても、今上の第三皇子である。その宮への贈歌としてはどうであろうか。作者は巧みにその人物に成り代わつて作品を作つてきた。これも、大納言の性格の一端をうかがわせる一首である。

なお、歌は、古今集卷一春 紀友則の、「花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべには遣る」を踏まえる。

花の香に誘はれぬべき身なりせば風の便たよりを過ぐさましやは

花の香のお誘いをお受け出来るような私でしたら、風の便りを見過ごこしましうか。見過ごこしたりはいたしません。